

# 小佐原遺跡

KOZAWARA SITE

—携帯電話基地局建設に伴う発掘調査報告書—

2011. 12

飯山市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、長野県飯山市大字小佐原 6879-1 番地に位置する小佐原遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は、携帯電話基地局（鉄塔）建設事業に伴い、日本コムシス株式会社、ドコモ事業本部モバイルエンジニアリング部より委託を受けた飯山市教育委員会が、平成 23 年 10 月 18 日から 10 月 24 日にかけて実施した。
2. 調査体制は以下のとおりである。

土屋 稔	飯山市教育長
森 勝	飯山市教育部長
高橋 宇一	飯山市教育委員会学習支援課長
望月 静雄	同 学習支援課長補佐（兼）文化振興係長
井端 伸介	同 学習支援課文化振興係副主幹

調査担当者 大平 理恵 飯山市教育委員会事務局職員  
作業参加者（五十音順・敬称略）清水 宏・高橋 英子・宮本くに子・宮本 鈴子  
協力者・機関 荻原 仁（地権者）・丸山 明広（重機）・柳原地区活性化センター
3. 本書で使用した方位は、すべて座標北を示している。
4. 図面等の整理ならびに報告書の執筆は、望月の監修のもと、調査担当の大平が行った。
5. 調査にかかわる写真・図版等は飯山市ふるさと館に保管してある。遺物の注記番号は「KZH23」とした。

## 目 次

I 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 小佐原遺跡の発掘調査	
1. 発掘の経緯	6
2. 調査の方法	7
3. 基本層序	7
4. 調査の成果	8
III 結語	10

## 図 版 目 次

第1図 周辺の遺跡	2	第2図 過去の調査	5
第3図 小佐原遺跡調査区設定図	6	第4図 基本層序	7
第5図 遺構分布図・個別図	9	第6図 出土遺物	10
第7図 東西断面模式図	10		

# I 遺跡の位置と環境

## 1 地理的環境

小佐原遺跡が所在する飯山市は、長野県の最北、新潟県に接する位置にある人口2万3千人の地方都市である。飯山市の中央部に位置する飯山盆地は、北上する千曲川に沿って紡錘状に展開する南北長約15km、東西幅は最も広いところで約6kmの盆地で、南は長野盆地と接し、北は新潟県境に向かって取束し峡谷状の谷地形へと変わる。

盆地の中央部には長峰丘陵とばれる南北方向に小高い丘が縦断し、この長峰丘陵と千曲川で飯山盆地は二分される。千曲川の右岸を木島平、左岸を常盤平、さらに常盤平から長峰丘陵を越えた西側に外様平と狭長な三つの沖積地を単位として捉えることができる。

遺跡の所在する小佐原地区は外様平の南端に位置し、長峰丘陵と鬼ヶ峰と呼称される小丘およびその間の低地とにまたがっている。鬼ヶ峰丘陵は長峰丘陵から残丘状の支脈となつて張り出した小丘陵で、南側は皿川の浸食により比高差10mを計る崖となっている。

鬼ヶ峰丘陵のほぼ中央には、旧飯山町から富倉峠を越えて越後へ抜ける旧道が東西に貫いている。この道路を境として鬼ヶ峰丘陵全体に広がる遺跡を区分し、平安時代を中心とした遺物の分布が見られる北側を鬼ヶ峰遺跡、縄文時代・弥生時代の遺物分布が確認される南側を小佐原遺跡としている。

## 2 歴史的環境

ここでは、外様平を中心とした飯山盆地周辺の縄文時代から中世における遺跡の分布状況について記述する。

小佐原遺跡(11)では、飯山盆地で最も古い縄文土器である表裏縄文土器がまとまって出土している。これらの土器は、草創期終末から早期前半に位置づけられるもので、丘陵上の北竜湖遺跡、針湖池遺跡(21)などでも出土しており、縄文時代において飯山地域で本格的に活動が始まったのはこの時期と位置づけられる。早期には押形文土器が十三ヶ丘、温井、北竜湖周辺で出土している。

縄文時代前期は縄文海進に象徴されるような気候の温暖化が進み、定住化が加速して集落形態や土器の器種、道具のセットなど、縄文時代を特徴づけるさまざまな要素が出揃った時代でもある。飯山では前期前半に田草川尻遺跡などで土器の出土が見られるのみであったが、前期中葉には有尾遺跡(3)で住居跡に伴う良好な一括資料が出土し、「有尾式」という標識設定が早示された。前期後半には千曲川に臨む大倉崎遺跡で堅穴住居跡が7軒確認されたほか、遠隔地との交流が想起される無文特殊浅鉢形土器が破片も含め多量に出ているのが注目される。

前期末に遺跡数は減少するが、中期になると再び増加し、上偶を多出する深沢遺跡、小佐原遺跡から皿川をはさんだ対岸に位置する須多ヶ峯遺跡(10)などの集落遺跡が発掘されている。遺跡数や住居跡などの遺構数が増加し、土器などの遺物から他地域との活発な交流の跡が見られる点は長野県全域の傾向と一致するが、中网信に比べると規模は小さく、



第1図 周辺の遺跡 (S=1:25,000)

住居跡数が10軒を越える遺跡は確認されていない。

縄文後期に入ると気候は再び寒冷化に向かうと考えられており、集落の形態ははっきりしなくなる。宮中遺跡、東原遺跡などで北信地域を特徴づける石棺状遺構が密集する墓域が確認されている。晩期の代表的な遺跡としては、田草川の扇状地扇頂に位置する山の神遺跡があり、サケまたはサメを想起させる魚形線刻土器が出土しており、生業との関連が注目される。

農耕を基盤とした社会が信州各地で確立するのは弥生時代中期後半(約1900～2100年前)になってからである。千曲川のもたらした自然堤防と後背湿地が広く展開する飯山盆地は、初期水田開発の適地であった。長峰丘陵と外様平の西縁扇状地は弥生時代の遺跡密集地であり、拠点集落と呼ばれる安定した大きな集落とその周辺の小集落が形成された。丘陵上の長峰遺跡群は弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が密集しており、その中でも小泉遺跡は堅穴住居跡をはじめとして百墓もの木棺墓や多数の掘立柱建物群などが小丘ごとに展開している。外様平においては、北原遺跡(16)、鍛冶田遺跡(14)、釜淵遺跡(33)などの調査で、肥沃な沖積地を望む小扇状地の緩斜面の利用が始まったことがうかがえる。

さらに目を広域に転じると、銅鐔・銅戈を共出した中野市柳沢遺跡、渦巻文裝飾付鉄剣が出土した木島平村根塚遺跡など、千曲川の氾濫原に突出した規模の集落・墓の発見が相次ぎ、西日本・大陸系の文化要素の導入や階層化、広域の交流と小地域圏の形成など、長野県北部における弥生時代の動態が明らかになってきている。

古墳時代前期には前方後方墳が飯山市、中野市内に出現したほか、北陸の影響を受けた土器や搬入品が増加した。前方後方墳につづき大規模な前方後円墳がより狭い範囲に分布して数も限られる点から、次第に地域をまとめる首長が成長してきたと推察される。集落遺跡については、弥生時代末から継続する遺跡が多く、柳町遺跡・上野遺跡・須多ヶ峯遺跡で住居跡が検出されている。柳町遺跡では溝跡から古墳時代前期の完形の土器が多出し、田草川尻遺跡では後期の祭祀遺構が確認されるなど、北陸地方と強い類縁性のある土器が祭祀に伴って出土している。長峰丘陵について言及すると、南から有尾遺跡、有尾古墳、柳町遺跡、大塚古墳群、照里古墳群、照丘遺跡などが分布し、弥生時代にひきつづき、沖積地を望む丘陵縁辺部の積極的な利用を裏付けるような集落・墓が確認されている。

古墳時代から奈良時代、平安時代への展開は、飯山盆地周辺においては不明瞭な点が多い。奈良～平安時代前期は遺跡がこの地域から消えてしまうかのような空白の時期にあたり、東北に向けての人の大規模な人の移動の可能性、遺跡が地下深くに埋没していて未発見である可能性、土器の編年上の問題などが指摘されている。

外様平においては、9世紀後半から10世紀にかけて律令制のもとに開拓が進み、有力者の墓地が確認された小佐原遺跡(11)・鍛冶田遺跡(14)、鍛冶関連の土坑や井戸跡、合口式壟墓が発見された北原遺跡(16)のほか、鬼ヶ峰遺跡(12)・正行寺北遺跡(22)・別府原遺跡(24)・布施田神社遺跡(25)・釜淵遺跡(33)など、遺跡数が増加する。有力者の墓跡や鍛冶遺構の発見が相次いだり、全体としては小規模な平安集落が点在する外様平の様相が看取される。

中世における外様平で代表的な遺跡として、永仁4年(1296)年銘の呪符木簡が出土した

釜淵遺跡(33)がある。漆碗・鳥形木製品などの木製品も発見されており、当地方に存在したとされる「常岩の牧」を具体的に追及できる資料が揃いつつある。

14～15世紀になって地方豪族の城館が造営され、そのいくつかは発掘調査により内容が明らかになっている。大倉崎館跡、有尾遺跡(3)、十日町街道沿いに位置する長者清水遺跡などが発掘されており、青磁・白磁や珠洲焼、国産陶器など、遠隔地から運ばれた遺物が多く出土している。

小佐原においては、小佐原遺跡の南端、皿川に面する崖上は城端(じょうはな)と呼ばれ、岩井氏あるいは尾崎氏系といわれる小佐原氏が居館として利用していたとされているが、木調査であり詳細は不明である。小佐原遺跡より500m北東の南條遺跡(17)では、15世紀後半から17世紀を中心とした農村が広がっていたことが調査により明らかになった。

時代を通して概観すると、田草川尻遺跡、有尾遺跡、上野遺跡など、複合遺跡は概して千曲川の近くの微高地上に位置しており、千曲川が重要な資源・交通手段であったことがわかる。飯山城の南側、市街地が遺跡の空白地なのは、町づくりにあたって西側丘陵の削平・沖積地の埋立を行っているためと考えられ、遺構確認面が現地表面よりかなり深くに埋没している可能性が高い<sup>※1</sup>。飯山市の遺跡の傾向として、北陸地方から信濃への北の玄関口として、北陸地方との関係が深い時期に遺跡数が増加すること、上野遺跡、田草川尻遺跡など、時代を超えて利用され続けた複合遺跡は千曲川の比較的近くに存在し、時代を通して千曲川の水運が大きな鍵になっていたことが上げられる。

※1 高橋桂氏のご教示による

## 過去の調査

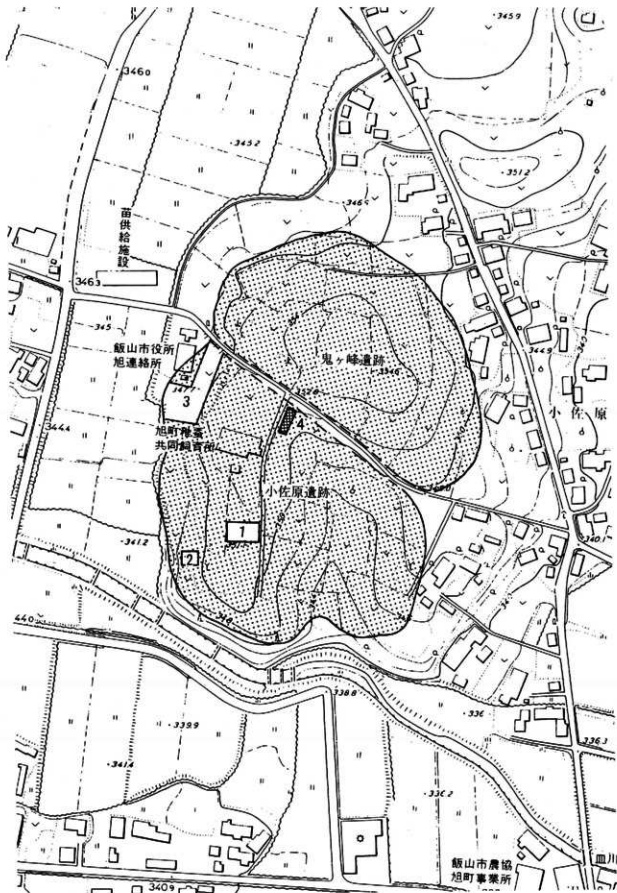
小佐原遺跡では過去に3度の発掘調査が行われている(第2図)。

昭和44年4月、畑作転換に伴う深掘りで土器が多量に出土し、初めての本格的な調査が行われ、弥生時代後期の竅穴住居跡1軒を完掘している。

同年6月、4月の調査の際に近接する畑地より表裏縄文土器が採集されたことを契機として二度目の調査が実施された。ごく限られた小範囲での調査ではあったが、縄文草創期後半から早期前半に位置づけられる表裏縄文がまとまって出土し、少量の石器も伴出した。遺物は耕作土の黒色土からローム漸移層にかけて出土し、一部はローム層にくいこんでいた。出土数約1500点、若干の無文土器を除き、いずれも器面に回転縄文を施文しており、底部は一点の平底を除けば尖底であった。

3度目の調査は平成2年、農村総合モデル事業農村環境改善センター(柳原地区活性化センター)の建設に伴って実施された。丘陵を街道沿いに西に下り外様平に接する地点で、調査の結果、長辺2m、鉄釘を伴った木棺墓が1基検出された。灰雑陶器や黒色土器などの副葬品から、平安時代の有力者の墓と推定されている。

今回調査した第4次地点は、小佐原遺跡と鬼ヶ峰遺跡を分ける旧街道沿いに位置し、昭和44年の調査地点から北側へ70m、北側の鬼ヶ峰遺跡の中心に向かい、ゆるやかに上っていく緩斜面にあたる。



第2図 過去の調査 (S=1:2,500)

- 1 昭和44年4月調査地点(弥生) 2 昭和44年6月調査地点(縄文)  
 3 平成2年調査地点(平安) 4 平成23年調査地点(縄文)

## II 小佐原遺跡の発掘調査

### 1. 発掘の経緯

本調査は、日本コムシス株式会社 ドコモ事業本部が計画した携帯電話基地局の建設事業によるものである。

平成 23 年 7 月 11 日 文化財保護法第 93 条第 1 項による埋蔵文化財発掘通知が提出される。

平成 23 年 7 月 25 日 長野県教育委員会より事前調査の指示。

10 月 11 日 日本コムシス株式会社 ドコモ事業本部と飯山市長との間で発掘調査委託契約を締結。

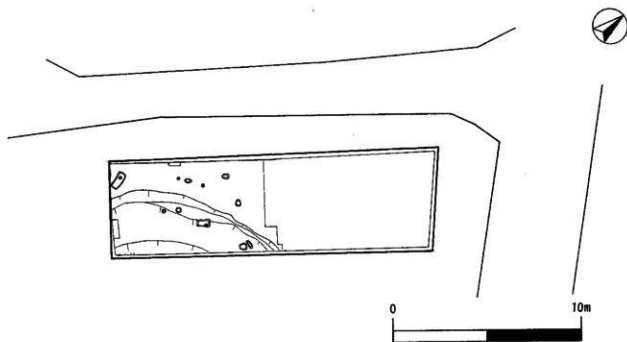
10 月 17 日 調査区表土剥ぎ

10 月 18 日～10 月 24 日 発掘調査を実施。

10 月 24 日 全体写真撮影

10 月 29 日 調査区埋め戻し

10 月～12 月 図面整理、トレース、図版作成、原稿執筆、報告書刊行。  
すべての作業が終了する。



第 3 図 小佐原遺跡調査区設定図 (S=1:200)



## 2. 調査の方法

調査は、表土掘削、遺構の検出と掘削、記録作業、埋め戻しの順に行った。

表土掘削作業は 0.4 m級バックホーを使用した。作業は表土途中まで重機で掘削し、以下は作業員が掘り下げた。調査区の南半は耕作土に黒土が混ざり、北半はロームが混ざって明黄褐色を呈していた。スコップ、じょれん等を使い床土を除去して遺構確認を行ったところ、調査区南東に向かって黒色土の落ち込みが、その周辺に土坑と輪郭の不明瞭な小ピットが検出された。調査区の北半分は耕作土が地山まじりの黄褐色土であったため、遺構は削平されていると判断し、南半分のみ調査を行うこととした。

遺構は確認面を撮影し、半截し土層断面を観察・記録した後完掘した。

落ち込みは地山の明黄褐色土層上面まで層位ごとに掘り下げた。

南側、西側の壁際に幅 30cm、深さ 30~50cmのサブトレンチを設定して、旧石器時代の確認を行ったが、明黄褐色土層中からは石器等の遺物は発見されなかった。

完掘後、主にリバーサルフィルムを用い全体写真を撮影し、測量は平板・レベルを用いて 1:20 を基本とした平面図・断面図を作成した。補完的にデジタル一眼レフカメラを使用している。

## 3. 基本層序

小佐原遺跡の調査前の現況は、畑地であった。

標高は、もっとも高い北西で 344.4m、遺構検出面での高さは 343.6m である。

基本土層は以下のとおりである。

- I 層 耕作土、床土。粘性・しまりとも弱い。
- II 層 黒色土。粘性弱く、しまりやや強い。
- III 層 黒色土と明黄褐色土のまじり。II層から III層への漸移層。
- IV 層 明黄褐色土。地山。

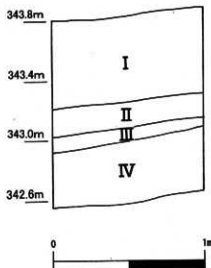


図 4 図 基本層序：調査区南壁 (S=1:50)

#### 4. 調査の成果

87 m<sup>2</sup>の調査により、土坑2基、小ピット9基を確認した。

地山(明黄褐色土)での比高差は最も高い西側が343.8m、最も低い東側が342.7mで、東側に向かって比高差0.9mと極端に落ち込む地形であった。

1号土坑は現地地表下30cm、耕作土を除去した段階で明黄褐色土層中に黒色の隅丸方形のプランが発見された。長軸95cm、短軸45cmの隅丸方形で、底面に円形の小ピットが浅く掘り込まれ、深さは50cmである。長軸は北から17°西に振れる傾きで、2号土坑と56°の差がある。

2号土坑は現地地表下70cm、耕作土・落ち込みに堆積した黒色土を除去した段階で、明黄褐色土層の斜面に黒色の隅丸方形のプランが発見された。長軸70cm、短軸35cmの隅丸方形～楕円形で、確認された時点で深さは20cmである。底面は凹凸があり、耕作により上面は削平されていると考えられる。長軸は北から39°東にふれる傾きを持ち、1号陥し穴状遺構と56°の差を持つ。

2つの上坑は、隅円方形で底面に小ピットをもつ形状、黒褐色土の堆積状況、斜面に位置することと、近隣の発掘調査事例を照らし合わせ、縄文時代の陥し穴である可能性が高い。遺物を伴わないため時期は不明であるが、周辺の事例より縄文時代前期～後期の所産であると思われる。長峰丘陵上の針湖池遺跡ではTピット・長方形土坑の2種類の陥し穴が検出されており、縄文時代後期に比定されている。

調査区の東壁最下層で、腐朽し粘土質に変化した杭状のものが地山に刺さった状態で確認された(写真図版3-17)。人為的に打ち込まれたものと思われ、陥し穴の逆木の可能性も視野に入れて土層堆積を確認したが、陥し穴上の掘り込みは確認できなかった。落ち込み地形が埋没する時期を推定する資料となりうるが、現時点での詳細は不明である。

小ピットは明黄褐色の地山に円～楕円形、不整円形のプランで確認された。

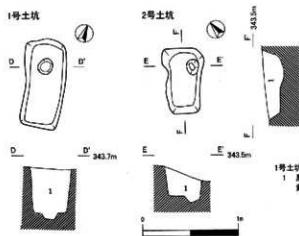
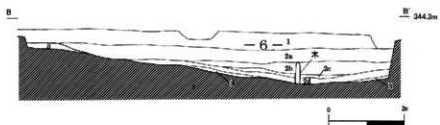
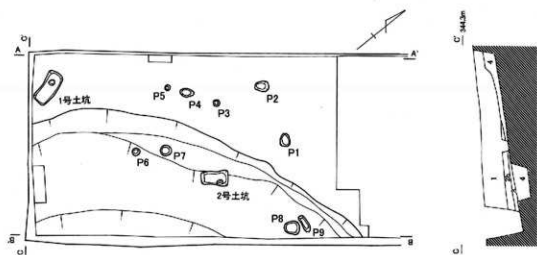
陥し穴状遺構と比較して、灰褐色土の不明瞭な輪郭であらわれたこと、周囲に径5～10cmのしみ状の褐灰色土が複数確認されることから、人為的なものではなく、木根痕など自然の作用の結果である可能性が高いと考えている。

これらの上坑・ピット群の関係、過去の調査区との関係は不明である。

遺物は縄文土器底部片1点、陶磁器片2点を確認した。

いずれもI層下層の出土で、遺構に伴わず、陥し穴状遺構をはじめとした遺構との関係は不明である。

第6図1は縄文土器は平底で、底面から稜線をもって立ち上がり、器面にR.L縄文をまばらに施している。時期は確定できないが、胎土が緻密であり、平底である点、縄文の施文方法などは昭和44年の調査で出土した表裏縄文系の土器群と異なり、より新しい時代であることが推察される。



南壁・東壁・西壁(AA', BB', CC')

- 1 黄土
- 2a 暗褐色土 粘性强、しまりやや弱
- 2b 黒色土 粘性やや強、しまりやや弱
- 2c 暗褐色土 粘性强、しまりやや弱  
褐色粒子を多量に含む
- 2d 黒色土 粘性やや強、しまりやや弱  
褐色粒子を多量に含む
- 3 黒色土(黄褐色土の層に)  
粘性やや強、しまりやや弱
- 4 黄褐色シルト 粘性强、しまり強  
φ 1~3cmのスコリア少量含む

1号土坑・2号土坑(DD', EE', FF')

- 1 黒色土 粘性やや弱、しまり非常に弱  
黄褐色ロームブロックを少量含む

第5図 遺構分布図 (S = 1 : 100) ・遺構個別図 (S = 1 : 40)

(遺構観察表)

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1号土坑	95	45	50	底面に径15cmの浅いピット有
2号土坑	70	35	20	

	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
P1	35	27	14	P4	36	19	15	P7	20	18	19
P2	36	24	13	P5	15	13	11	P8	50	18	10
P3	15	16	11	P6	28	25	19	P9	40	36	21

(遺物観察表)

	器種	出土位置	法量	残存	成形・胎土・その他
1	縄文土器	表土	底径7.4cm 高さ2.0cm	20%	石英・角閃石を多量に含む。流紋岩を少量含む



第6図 出土遺物 (S = 1 : 4)



第7図 東西断面模式図

### III 結語

今回の調査では、87.5 m<sup>2</sup>の調査で土坑2基、小ピット9基を検出した。

遺物は縄文土器底部片1点・陶磁器片2点で、遺構確認の際に耕作土から出土し、遺構には伴っていない。また、西から東へ向かって急激に落ち込む旧地形が確認され、西側は削平され、東側には黒色土が堆積していた(第7図)。

確認された土坑2基は、縄文時代の畝圃に使用する陥し穴と考えられ、長峰丘陵から外様平にかけての縄文時代の空間利用を把握する上で重要な一資料となった。小佐原遺跡の1.5 km北、長峰丘陵上の針湖池遺跡で縄文時代後期と推定される陥し穴列が数列にわたり展開されていることが確認されており、有尾遺跡、小泉遺跡でも斜面上に整然と並んだTピットが検出されている。陥し穴群の多くは土器を伴わず、詳しい時期は不明であるが、縄文時代前期～後期とされており、今回の調査で発見された土坑も同様の時期と考えられる。長峰丘陵とその周辺での土地利用の変遷を考える上で注目される。

過去の調査結果を統合すると、当地点は小佐原遺跡の周縁にあたり、中心地は昭和44年の調査地点周辺にあると想定される。これまでの調査の積み重ねにより、鬼ヶ峰丘陵にお

ける空間利用のあり方が徐々に明らかになってきた。小佐原遺跡の中心部、馬蹄形上にくびれた西側部分のうち、弥生期は背頂部より東傾斜面に、縄文草創期～早期の痕跡は背頂部より西傾斜面に広がっており、その周辺から長峰丘陵へと続く斜面は狩猟・採集などの生業の場として使われたと推察される。

一方、平安時代の生活痕跡は削平のため不明瞭な点が多い。平成2年の小佐原遺跡の調査で地域を治める有力者の木棺墓が検出されていることから、外様平に望む西側縁辺部に展開していることが予想される。中心地はどこであるかは鬼ヶ峯遺跡の調査例がないため不明であるが、鬼ヶ峯丘陵全体の遺跡範囲を再検討していく必要があろう。具体的には、縄文・弥生時代を小佐原遺跡、平安時代を鬼ヶ峯遺跡として旧街道で線引きしている範囲を、平安時代の木棺墓が発見された小佐原遺跡第三次調査の成果をもって鬼ヶ峯遺跡に変更することができるかの検討である。

また、小佐原遺跡、鍛冶田遺跡、北原遺跡の調査で有力者の墓域はある程度把握できたものの、集落の様相がはっきりしない。外様平に展開する鍛冶田遺跡・北原遺跡なども含めた飯山盆地における平安時代の集落の変遷を探っていくこと、さらには文献上の常岩の牧との関連性を探ることが今後の課題である。

補遺：現代に近い時代であると思われるが、西壁断面の表上下20cmの間に黒褐色上と黄褐色土が斜めに切り込まれ、縞状に重なっていた(写真図版2-14)。トラクタプラウ耕(農土の切削・反転・砕土)の痕跡と考えられ、人間の活動が土地に明確に刻まれた例としてここに記しておく。

#### 参考文献

- 高橋 桂 1969 「北信濃城端遺跡調査略報」 『信濃』 21-7
- 飯山市教育委員会 1980 『北原遺跡調査報告書』 飯山市埋蔵文化財調査報告第4集
- 飯山市教育委員会 1980 『鍛冶田』 飯山市埋蔵文化財調査報告第5集
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史 考古資料編(2) 主要遺跡(北・東信)』
- 飯山市外様公民館 1986 『外様郷土史』
- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第14集
- 飯山市教育委員会 1988 『釜淵・北戸戸遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第16集
- 飯山市教育委員会 1991 『小佐原遺跡・関沢遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第25集
- 飯山市 1993 『飯山市誌』 歴史編上巻
- 飯山市教育委員会 1995 『小泉弥生時代遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第42集
- 飯山市教育委員会 1995 『柳町遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第44集
- 飯山市教育委員会 2000 『南條遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第62集





1. 調査区から高社山を望む (北西から)



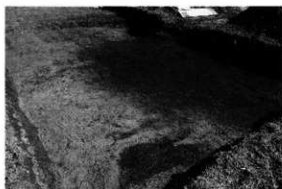
2. 表土除去 (北から)



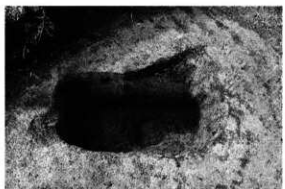
3. 表土除去・精査後 (北から)



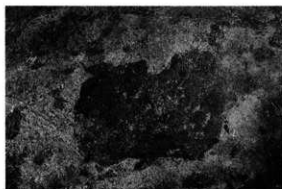
4. 調査風景 (北から)



5. 1号土坑 検出状況 (南西から)



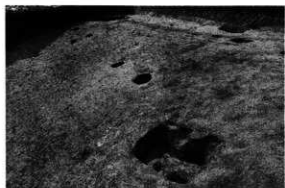
6. 1号土坑 完掘 (北東から)



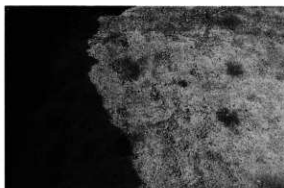
7. 2号土坑 検出状況 (東から)



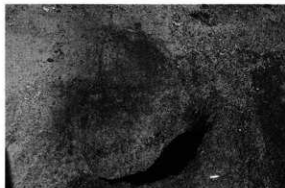
8. 2号土坑 土層堆積状況 (南西から)



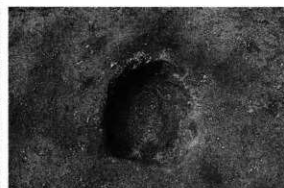
9. 2号土坑・ピット群完掘（北から）



10. 小ピット群検出状況（東から）



11. ピット1 土層堆積状況（南から）



12. ピット1完掘（南から）



13. 南壁（北から）



14. 西壁（東から）



15. 東壁（西から）

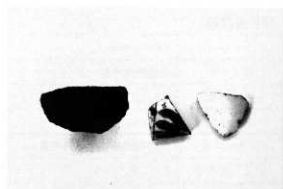


16. 調査風景（北西から）





17. 東壁最下層 木出土状況 (西から)



18. 出土遺物



19. 完掘 (南から)

## 報告書抄録

ふりがな	こざわらいせき 2							
書名	小佐原遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 77 集							
編者名	大平理恵							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2253 長野県飯山市大字飯山 1436-1 TEL 0269-62-3342							
発行年月日	2011 年 12 月 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
こざわらいせき 小佐原遺跡	ながの 長野県 いひやま 飯山市 こざわらいせき 小佐原 6879-1	20213	109	36° 52' 17"	138° 21' 25"	20111018 ～ 20111024	87.5 m <sup>2</sup>	通信基地 局(鉄塔)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小佐原遺跡	集落跡	縄文 弥生 平安		陥し穴状遺構 2 ピット 9		縄文土器		-

飯山市埋蔵文化財調査報告 第 77 集

## 小佐原遺跡Ⅱ

平成 23 年 12 月 1 日発行

編集・発行 飯山市教育委員会

長野県飯山市大字飯山 1110-1

印刷 足立印刷所

